

支那文庫
5883
8

横濱新報

り
ほ
ま

Guji
Kanda

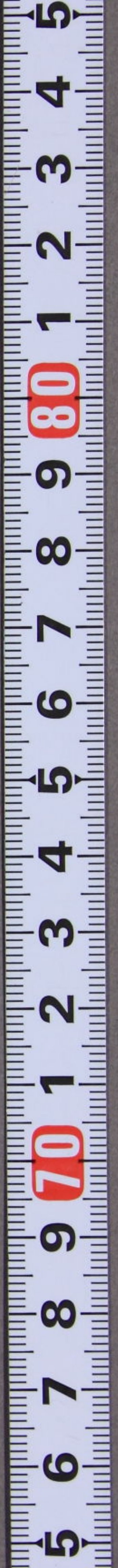
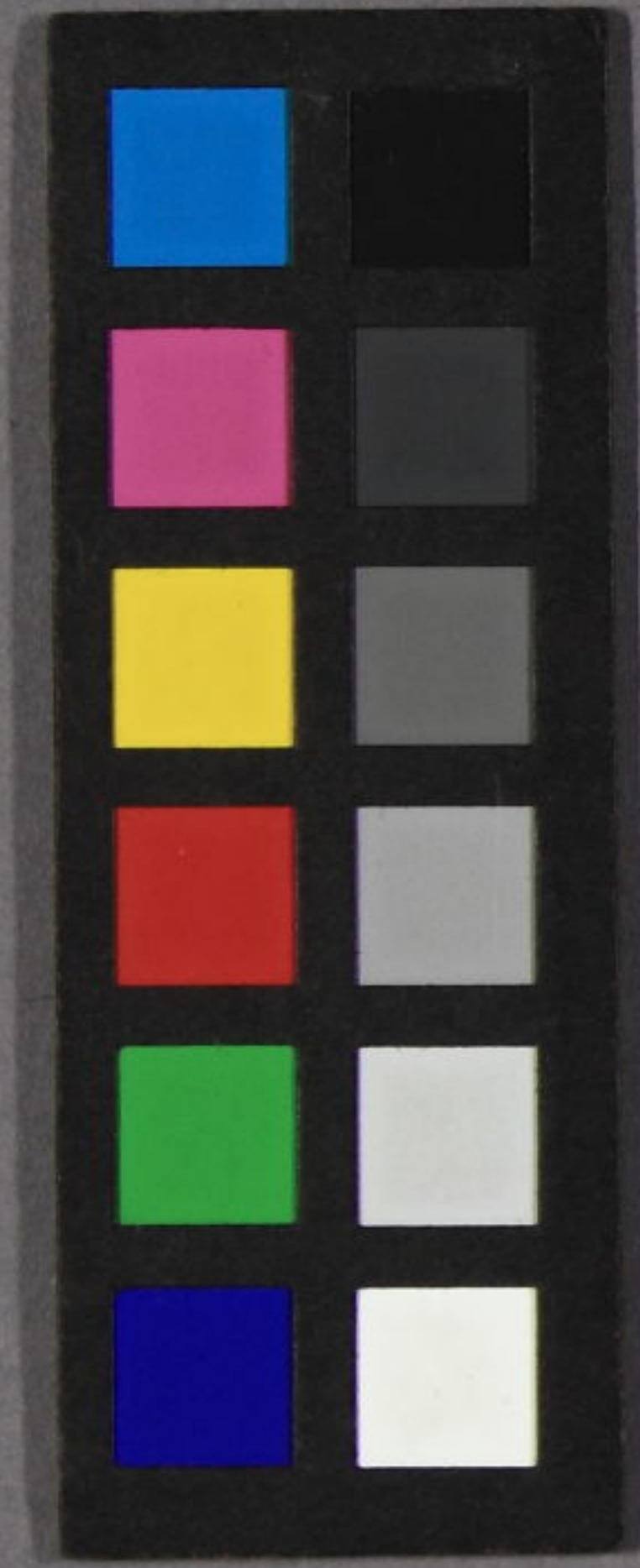
第三編

九十三番

ウエンリート

定價壹匁

K.S. ASOM



特 文庫10
7387
3

蘇 賞 條 第 三

第三條

六十三番

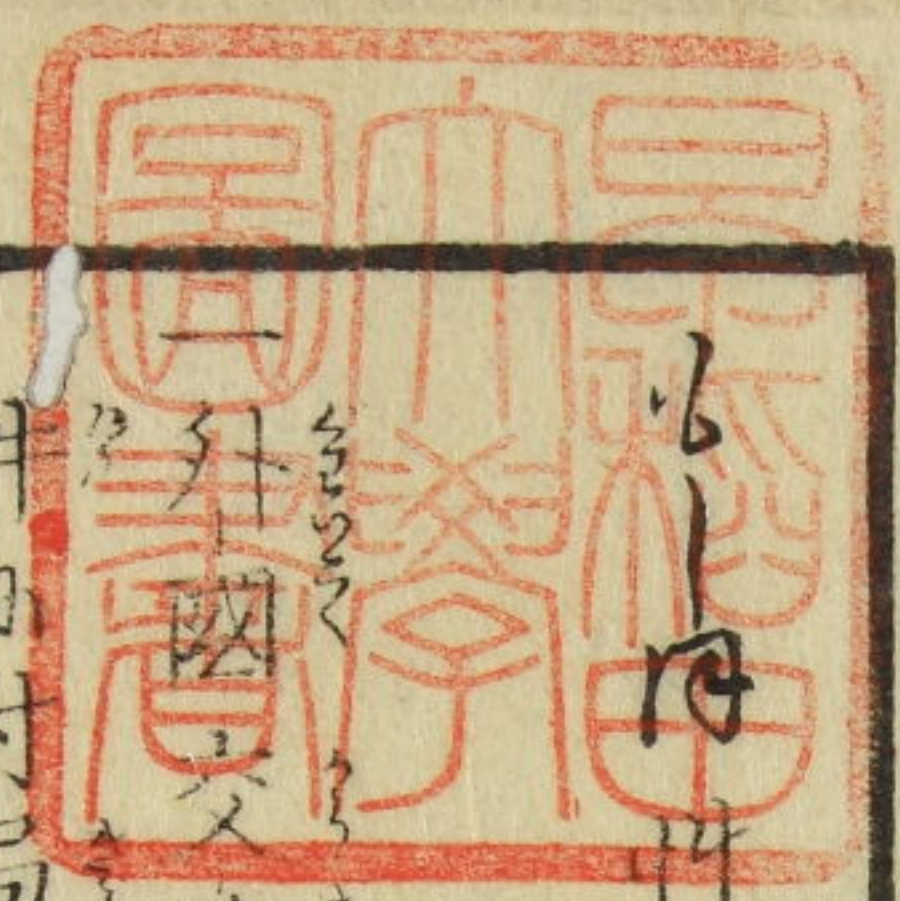
ウエーニート

おのり

K.2.V20M

賞 壹 分

慶應四年戊辰閏四月廿九日



小 冊 三 篇

○ 條 約

一 外國之 際ハ我 皇國の興廢ハ關係至大至重ノ事
 件ニ付 局中 勤勞者 役々 各同心 協和 長短 相助 確乎 不
 動ノ 見識ヲ 持シ 信義ヲ 外國ノ 失せざるヲ 旨趣トシ
 一局中 一 勤勞者 各 區分ヲ 定横濱 箱館 長崎 神戸
 傳達 往返 する 處ノ 公用ハ 其 掛ノ 役々 是ヲ 專任シ 首尾
 貫徹 するヲ 要ス 故ニ 混亂ノ 憂ある 事ナリ
 一局中 九時ハ 出勤 午後 七時ハ 退散 中間 一 統 勉強 各 精力
 を 勵シ 互ニ 各般ノ 諸事件ヲ 談論シ 自己ノ 旨意ハ



満ざる者腹臆ちく其件とを説破し餘念を不可残り
過失ある時ハ直小悔改し敢て金言耳に逆ひ良薬口
小苦き通弊を不可踏

右之通約束を定め其枝葉の如きは互小信實を盡し
精細に評議し第一我皇朝の大典を以て根軸と成し
字内の通議に基き富強克實を海外に延及せん事を
希ふ

戊辰閏四月

外國事務

小松帯刀

後藤家三郎

○閏四月五日御觸

江戸市中取締之爰町奉行江御仰被遊告 大總督宮

様々被仰出の間一際勉勵可致告 田安中納言殿々被

仰渡の間取扱振之儀相伺ひ品も有之得共右ハ追而御沙

汰有之の迄前々之通相心得可申告被 仰渡ひ付而者

公事訴訟筋之儀者勿論都而民情をわけて不安之爰有之の

無掛念月番之番所江可訴出御時節柄を憚り差控

居の族も有之趣相聞の間右之旨町中不洩様早々可相

觸候

○滑耀先生日記の抄寫

戊辰四月七日下總國結城落城城主水野某官軍えんぞくの屬ぞくたるを其子某江戸ありに在る此吏を聞大いに怒りたるを
三百年來徳川氏の恩澤を蒙りたるを此期このときにいつるを官
軍ともぞくに從ふ吏甚不義なり父を害ふべく差置がごとく
俄に合戦の用意を期しけるが兵丁武器ぶきを多く小吏をうけ
けし徳川家一たのめて大砲數挺を以て歩兵數百人
を借請即江戸を打立ちて父のころりたる本城をとり
かごと大砲を打つるを攻立り其父城中ちゆうにたまりて落
行けぬ其子城入りて三日たるとさる小近きつらふ

たむろ居たる官軍此由をきき不孝不忠の者なり
とく忽ちみせめあつていひたがふあまはなりみろしを
八日下野國壬生の城主鳥井某者わめて官軍の屬
たるの處今日官軍より使者を以て大砲を借請たき
よ掛合に及けるが早速兼引の砲術先生も
差漆借渡りし數とを
九日官軍二百五六十人壬生より野州のれんぎ楡木らぬ鹿沼等の駅
を經り日光の方へ通行せし薩長なるび小倉根の
兵士たるをこそ
十日官軍二百餘人日光より二里南今市といふことと

押寄たるは日光奉行新庄右近將監出むのひて何等の義あり此處つゝ差向りたるぞ此處ハ徳川家の本祖の廟所にてゆと申けし元より東照宮へ用吏ありて差向たるゆへに朝敵板倉伊賀守なる者日光山におかると居るより聞及ひつゝ間討手むのひたるなりと答るる間去るゝ暫く御待被下す某とくと穿鑿の上ありて御わく可申官軍も日光山におかると
十一日日光奉行某ハ伊賀守をひきとり高原越の閑道より會津へおゆるりたりて宗徒の家臣八人を以て

身代として官軍へ渡りたるを
○今日關宿の兵官軍の先鋒として關東勢と岩井といふ處あり戦ひたるが關宿の兵衰切たりたりは官軍利を失ひしとぞ
十二日近日江戸旗下の士脱走しそちちちに屯集するものほろご多し種々の隊名ありて二百人或ハ三百人より五六百人ありともありとの風聞あり
十三日官軍今市を引退き板倉がとらり八人の者を宇都宮へはきゆき城主戸田某おとりけおれをれより軍使を以て喜連川・大甲原・丹羽等へ申通たり

會津一攻入るべきの間速小人数をくり出さるべき也
 とつりなきはいつとも兼諾の趣返答あふとのつづも
 會津の兵安久津川の邊に充滿したるのよう風
 聞らりあられはされも兵卒を出すのちり

○今日栗橋のまをり上り彰義隊の兵官軍の
 糧船二艘をえはきりて陸地より鉄砲うちけ忽ち二
 艘とも分捕あつりしごと

十四日常州笠間の兵卒三百人余官軍の命を受
 野州宇都官の援兵とて操出し栗橋驛にて兵
 糧はつひぬくるをいんく彰義隊の兵驛をぐまの交

田の中火埋伏して侍居たるに案の如く笠間の兵卒
 ころりくるをえはきりて打出し鉄砲に
 不意とらるるを散りにたりの敗北しりけふり手
 負死人をたつらごあほしとぞ

○今日徳次良はとも合戦ありしと風聞たり
 十五日江戸脱走の歩兵二百餘人東寧川を下り總導
 河岸より上陸して下妻陣屋の役人を説伏せ大砲壹挺
 砲兵三十人金八百兩を借け夫より官軍の屯集したる
 關本とつふ處へ押寄日の八ツ時ころより合戦ははる
 夕六ツ時過あつたつひが關東方勝利を官軍の

笠間かさまの兵多半討死あましたるよし

○此日小山とよだの間あても合戦なりとも官軍不利のよしありて江戸脱走の兵士二百八十五人分捕ぶんとらの武具ぶぐ或い首ちどたぐさへ大平山へのぼりて一宿したりしと
○又下總の竹の原にても官軍と會津勢とたつひと風説なり會津勢關宿をたれもつひともつり

○又一手の關東勢絹川をわたりて入保由河岸より結城へ攻へしともつり

右滑耀先生日記十六日より閏四月五日迄の事ことの身四編ふ出スべし石橋小山合戦あか並宇都宮の戦いくさ其詳也



去ル十三日夕七ツ時頃相州箱根の下真鶴まがづのちをへ蒸氣あせ船三艘着岸ちかし木入保加賀守江届えきの徳川家脱走三百人乗込休泊やすみしゆり相届あひたる故小申原より役人出張しやうちやうあり相改あひかひをころ雑兵平士ともあてい凡三千人あり有之趣き翌十四日町觸出でゆ

歎なげき

むさう一飛のつらうせいし州のまよ

漢人かんじんふか

あゝのこたをわらわらふ

○

こころよき事多峰の葉を祝々の
 うさぎや川起されそまの垣
 存るありり白ひもふや梅の是
 ちるむと何とたうめんち能
 松うもよはりうさぎてわるみ水が
 粉をひりはるる粉のつひ色之
 およまふむぬきひとの情さか

寛 徳
 波 岐
 陀 塔
 一 柱
 雲 舟
 親 洲
 鹿 子

西垣文庫

文庫 10

7387

3